柏の歴史ある建物

柏市建造物調査報告書 4

柏市教育委員会

2021

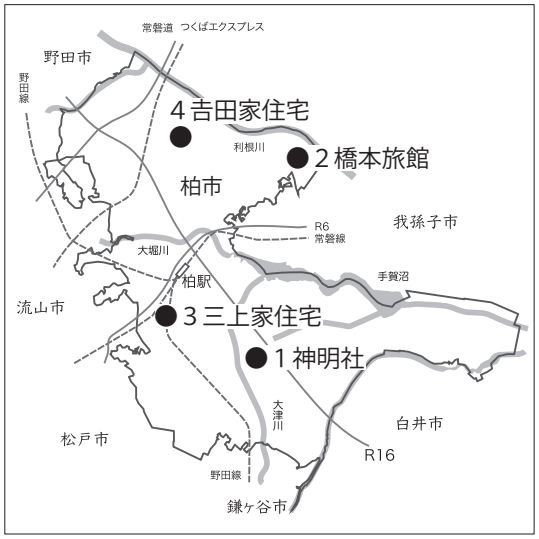
柏の歴史ある建物

柏市建造物調査報告書 4

柏市教育委員会

2021

案内図　千葉県柏市



柏市内における対象の位置図　章番号と名称を示す

表紙写真（右上から時計回りに）：
背景　橋本旅館［1］
表紙　吉田家住宅室内［2］・三上家住宅［3］・神明社神楽面 / 猿田彦と狐［4］・神明社本殿［5］
裏表紙　橋本旅館平書院建具［6］・吉田家住宅稲荷神社狐［7］・神明社弁天社［8］

表紙デザイン：　株式会社 精興社
写真撮影：　［1-2］江藤隆博、［3］もば建築文化研究所、［4］柏市文化課、［5-8］金出ミチル

例　言

1.　　本書は、柏市教育委員会生涯学習部文化課（以下、「文化課」）が実施した建物調査の記録である。調査対象は、神社・旅館・近代住宅・農家と、多様な建築の分類からなる神明社・橋本旅館・三上家住宅主屋・吉田家住宅の４件である。

2.　　文化課による各種調査の一環として原稿を作成し、本報告書の印刷・製本は令和３年度（2021）事業として文化課の市費による直営事業として実施した。

3.　　各建物の調査概要、本文執筆及び写真撮影・図面・挿図作成の担当は下記のとおりである。この他、史料・写真・図面の出典及び所蔵・撮影、作成者（敬称略。所属は調査時。）については、それぞれキャプションに記す。本書の編集は金出ミチルが行った。

第１章　神明社

調査日：2019 年 2 月 7 日（建物）、2019 年 12 月 8 日（鳥居）

調査担当：金出ミチル（柏市文化財保護委員会)、江藤隆博（文化課)

調査協力：小河原博志、高野博夫（文化課）

1　神明社の歴史［本文］　高野博夫

2-2　本殿の錺金物［本文・挿図・写真］　江藤隆博

修理後の鳥居（p32）、再建中の神楽殿（p37）［写真］　江藤隆博

上記以外の本文及び図面・写真：金出ミチル

第２章　橋本旅館

調査日：2019 年 12 月 27 日、2020 年 1 月 21 日・2 月 5 日、2021 年 2 月 5 日・3 月 29 日

調査担当：金出ミチル、市原徹（千葉市近現代を知る会）、江藤隆博

調査協力：小河原博志、高野博夫

1　布施の歴史［本文］　高野博夫

建物外観（p43-45）・瓦（p50-51）［写真］　江藤隆博

瓦調査（p50-51）［実測・拓本・トレース］　高松みき子、中田貴子、藤原明子、柳田真子（文化課）

瓦調査（p50-51）［所見・観察表］　山崎吉弘（羽生市教育委員会生涯学習課）

上記以外の本文及び図面・写真：金出ミチル

第３章　三上家住宅

調査日：2014 年 8 月 28 日・9 月 4 日

調査担当：中村文美、海東壱子、高橋和誠、渡辺健二

1　南柏と三上家の歴史［本文］　渡辺健二（文化課）

2-1　三上家住宅旧主屋概要［本文］　中村文美（合同会社もば建築文化研究所）

2-2　三上家住宅旧主屋［本文］　海東壱子（合同会社もば建築文化研究所）

図面：海東壱子、高橋和誠（ものつくり大学学生）　写真：中村文美

第４章　吉田家住宅

調査日：2020 年 3 月 3 日・3 月 10 日

調査担当：金出ミチル、市原徹、江藤隆博

調査協力：小河原博志、高野博夫

室内写真：江藤隆博

本文及び上記以外の図面と写真：金出ミチル

4.　掲載した図面はミリを単位とする。尺寸を用いる場合には特記する。

5.　調査及び本書の刊行に際して多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。
ここに記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）

柏市富勢地域ふるさと協議会　葛飾区郷土と天文の博物館　澤田瓦店（野田市）　神明社
市原徹　岩坂えり子　小峰園子　坂巻まり子　座間恒雄　谷口栄　星野保則
眞下和久　三上周史　三坂俊明　守康大　山崎吉弘　吉田竜也

参考文献

・　神明社
『沼南町史　第一巻』沼南町役場、1979
『沼南風土記』沼南町、1981
『柏市自然環境調査報告書』NPO 法人かしわ環境ステーション、2019
・　橋本旅館
柏市市史編さん委員会『柏市史　近世編』柏市教育委員会、1995
葛飾区郷土と天文の博物館『江戸・東京のやきもの』1~3、1999
眞下和久編集「富勢の人々 語り部　寺山橋本屋七代目に生まれた坂巻孝さんの体験談」柏市富勢地域ふるさと協議会発行、2006
柴又地域文化的景観調査委員会、葛飾区教育委員会『葛飾・柴又地域文化的景観調査報告書』2015
・　三上家住宅
柏市市史編さん委員会『柏市史　近世編』柏市教育委員会、1995
柏市市史編さん委員会『柏市史　近代編』柏市教育委員会、2000
『歴史ガイドかしわ』柏市教育委員会、2007
『今谷上町のいまむかし』柏市図書館サービス充実支援実行委員会、2009

※　本書は、柏市教育委員会の刊行する「柏市建造物調査報告書」の４冊目である。
今までの刊行物には通し番号は振っていないものの、下記３冊が該当する。

1　『旧吉田家住宅調査報告書』2008
2　『旧吉田家住宅保存修理工事報告書』2011
3　『空をつくる建物　高射砲第二連隊 照空予習室調査報告書』2018

目　次

第１章　神明社

1　神明社の歴史　7

2　境内と建築

2-1　境内　8

2-2　本殿　8

2-2-1　建物の特徴　17

2-2-2　錺金物　23

3　石鳥居　29

第２章　橋本旅館

1　布施の歴史　39

2　橋本旅館

2-1　概要　39

2-2　建物の特徴　48

2-3　平面の変遷　55

第３章　三上家住宅

1　南柏と三上家の歴史　65

2　三上家住宅旧主屋

2-1　概要　66

2-2　旧主屋

2-2-1　構造形式　67

2-2-2　変遷　77

第４章　吉田家住宅

1　はじめに　85

2　建物の特徴

2-1　概要　87

2-2　平面　87

2-3　小屋組　98

3　変遷と復原考察

3-1　昭和の改修　99

3-1-1　茅葺から桟瓦葺へ　101

3-1-2　平面の改造　101

第１章　神明社

所在地　：千葉県柏市塚崎 1460
建築時期：享保 18 年（1733）[本殿]

1　神明社の歴史

塚崎地区の神明社は、かつては風早村の村社に指定された神社で、大津川の中流右岸、藤心地区に対する丘の上に鎮座する。境内は鬱蒼とした森に包まれ、昭和 52 年に「町民の森」（現在は、「沼南の森」）に指定され一般に開放されている。

神明社の創建については、当時の資料が残されていないため不明であるが、『千葉県東葛飾郡誌』（大正 12 年発行）に「創建の年不詳なりと雖も徳治嘉元の間にあるものの如く、」と、鎌倉時代の年号が登場。『下総国旧事考』（明治 38 年発行）には「塚崎明神社。土人、神明と称す。神鳳抄に云う、二所太神宮御領、下総国相馬云々、祠官守氏社人四名…」とあり、古来より近郷近在の人々の信仰を集めてきた古社である。

社殿は、伊勢神宮・八幡社、春日社の三社を祀る典型的な三社神明造りで、伊勢神宮の方向を向いており、平安時代、この地に置かれた伊勢神宮の荘園、相馬御厨（みくりや）と密接な関係があったといわれている。神明社の鎮座する大津川流域は、相馬郡では最大級の谷津田として稲作が行われ、大井・戸張・増尾・高柳などの村々が営まれてきた。室町時代の「本土寺過去帳」には嘉吉 3 年（1443）の年紀のある人物に、「ツカサキ」という地名がみられる。

天正 18 年（1590）関東を付与され江戸城に入った徳川家康は、翌 19 年、領内の主な寺社に朱印状を与え、所領を安堵する。神明社もこの時、社領十石の朱印状を受け、明治維新まで維持された。近世初期幕府領であった塚崎村は、元禄 11 年（1698）本多正永の所領となる。本多氏はその後、駿河田中藩に移封されるが、下総領地一万石、四二ケ村は先祖からの領地として残された。本多氏の神明社に対する崇敬は厚く、宝暦 7 年（1757）には、七代目領主本多正珍（まさよし）が石鳥居［市指定有形文化財］を寄進。形は伊勢神宮外宮鳥居に似ているが、円柱にはやや転びがあり、掘立形ではない。田中藩は、船戸と藤心に下総領支配の陣屋を設けたが、藤心陣屋の代官も、宮司に苗字帯刀を許すなどの待遇を与えている。

境内には、三社殿をはじめとして拝殿・神楽殿・幄舎（とばりや）等多くの社や石祠があるが、石造物の中で鳥居とともに注目されるのが社殿に向かって左手の御手洗石。寛文 9 年（1669）、氏子たちが庚申待成就のために奉納したもので、彫法は素朴、市内最古の端正な姿を見せている。10 月 17 日が例大祭で、表参道脇には文化 4 年（1807）塚崎村若者中の奉納による、全長 16 メートルの 2 本の幟幡（のぼりはた）が掲げられた。風早村社の頃には、村の予算に神社費が計上され、垂纓冠に神事装束の村長が幣帛料を捧げ、今日でも近隣の藤ヶ谷・藤心の村々から「オゴゼン」と称する神饌が奉納されている。神楽殿では十二座神楽［市指定無形民俗文化財］が上演奉納される。神楽の構成は、古代神話をもとにした神楽舞を中心とするもので巫女（みこ）・猿田彦（さるたひこ）・湯笹・狐・恵比須（えびす）・餅投げ・鐘馗（しょうき）・玉取り・天宇妥女命（あまのうずめのみこと）・大幣（おおへい）・大蛇退治（おろち）・天岩戸（あまのいわと）という十二の舞曲からなる。しかし、後継者の少ないことや時間などの

制約で十二の演目すべてが奉納されることはなくなっている。

2　境内と建築

2-1　境内

境内は、伊勢神宮に向く南西方向に走る軸線を中心として、鳥居・拝殿・本殿が一直線上に配置されている。神明社の立つ土地は、昔から安定した場所として知られ、「はに」と呼ばれてきた。すなわち地面は、雨が降ると柔らかくなるものの、乾くと固くなる性質で、東日本大震災時にも大きな被害がなく済んだとのことである。

灯籠が両脇に並ぶ緩やかな勾配の石段を登った先に、宝暦７年（1757）の銘のある神明造の石鳥居が立つ。参道の東側には社務所［当初は幄舎（とばりや）として大正４年（1915）築］、と神楽殿［2021年再建］、突き当たりに拝殿［明治８年（1875）築、2013年改築］が位置する。この奥に瑞垣に囲まれた本殿が３棟並ぶ。

本殿を神社の中心に据え、境内の他の建物については、第二次世界大戦前までに多くを改築、近年には拝殿を改装し、お籠もり殿と神楽殿を建て替えるなど、時代の変遷とともに境内地内で建物を更新しながらも、神社の最も神聖な場所である本殿は古来のまま、大きく改変されることもなく、継承されてきたのである。

2-2　本殿

神明社の本殿は３棟からなり、瑞垣内中央に「御正殿」、向かって右に「八幡社」、同左に「春日社」の社殿が並んで立つ。それぞれの祭神は、天照大神、応神天皇、武甕槌神（たけみかづちのかみ）である。このように三社殿が並ぶのは、「三社託宣（たくせん）」という思想を体現する形式であるという。御正殿内宮殿の屋根の中に保管されている棟札より、これらの建物は享保18年（1733）の建築時期が裏づけられる。

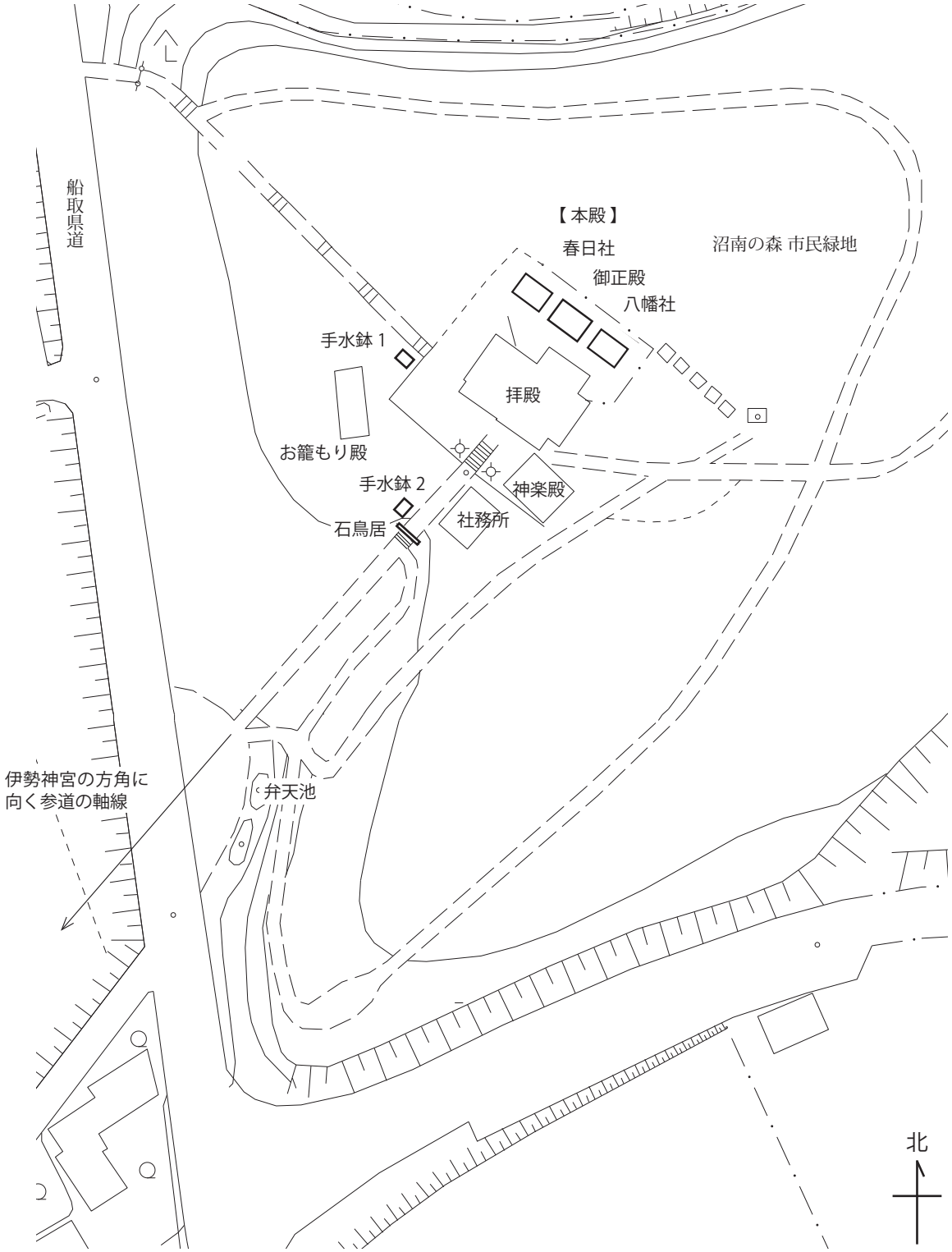
白木からなる高床式、切妻造平入、茅葺の神明社本殿三社殿は、伊勢神宮の社殿を規範とする神明造に分類することができる。厳密には、独立した棟持ち柱のある御正殿のみが神明造に近いながらも、社殿本体を指す身舎の梁間は１間で、棟通りに柱がない。

国の重要文化財に指定されている高床式の神明造本殿として、仁科神明宮本殿（長野県、江戸時代中期築）や神明社本殿（長野県、序貞元年［1684］築）が広く知られ、近年の指定では茨城県筑西市の内外（ないげ）大神宮の内宮本殿と外宮本殿（延宝７年［1679］築）が挙げられる。文化庁の主導により1972年から実施された各都道府県の近世社寺建築緊急調査の対象になった神社のうち、神明造は少数派である。近代に入り第二次世界大戦敗戦前までは国粋主義を体現する神社建築として、多くの招魂社、後に護国神社に神明造が採用されたこととは対象的である。

神明社の本殿三社殿が建てられた江戸時代中期には、今までにない建築を造りあげるために意匠及び技法上様々な試みがなされ、神社建築においても飛躍的な展開が見られた。このような背景の中、伊勢神宮と深い繋がりのある神明社では、当時日本の神社建築の原点ともいえる骨太な神明造の社殿を建てることを選び、緑豊かな社叢の中で地域社会とともに300年近い年月まもり続けている。

神明社 年表

大治	5年（1130）	平経繁相馬郡布施郷を伊勢皇大神宮に寄進
延文	5年（1360）	南北朝時代に編さんされた『神鳳鈔』に
		「相馬御厨、大神宮御領、蓋謂此也、祠官守氏、社領十石」の記述
天正	19年（1591）	徳川家康から社領十石の朱印を受ける
享保	18年（1733）	本殿三社を再建［棟札銘］
宝暦	3年（1753）	藤心村氏子、表参道石段を奉納
同	7年（1757）	2月　本多伯耆守正珍、石鳥居を奉納［陰刻］
		3月　石段の下に弁財天を奉納
		6月　本多伯耆守正珍、吉宗七回忌法要を惣奉行としてとりおこなう
		7月　本多伯耆守正珍の長男正堅早逝
天保	5年（1834）	近隣諸村の氏子、崇敬者、拝殿前に石垣を奉納
明治	4年（1871）	神明社官地とされ国に召し上げ
	8年（1875）	拝殿の再建
	34年（1901）	民有地に復す　境内の再整備開始
	35年（1902）	神楽殿の再建
	39年（1906）	風早村社に指定
大正	4年（1915）	幄舎（とばりや）（現社務所）建設
昭和	32年（1957）	本殿三社、拝殿、神楽殿の茅葺屋根を鉄板で覆う
平成	17年（2005）	境内のお籠もり殿の再建
	20年（2008）	石段の改修
	23年（2011）	駐車場の整備
	25年（2013）	拝殿の改築、幣殿と参集殿の増築
	31年（2019）	石鳥居修理、神楽殿解体
令和	3年（2021）	神楽殿再建



境内配置図　S=1/1000

柏市都市計画図を加工、加筆

伊勢神宮の方角に軸線をそろえた参道から神社境内を望む。

弁天池と弁天社

神明社本殿

南から見る　春日社・御正殿・八幡社

西から見る　春日社・御正殿・八幡社

御正殿

側面を見上げる

背側面

御正殿

正面

背側面

側面

八幡社

全景

妻を含む側面

正面扉廻り

木階

側面

春日社

全景

正面扉廻り

妻詳細

背側面

2-2-1　建物の特徴

ここでは便宜的に本殿正面を南面とし、以降の説明にはこの方位を用いる。また、境内にある本殿以外の建物及び石造物などについては、章末に掲載する。

構造形式

3 社とも、間口 1 間、奥行 1 間、切妻造、茅葺、平入とし、正面に木階を設ける。中央に据えられた御正殿の規模は両脇の八幡社（東側）と春日社（西側）より一回り大きい。

柱・小屋組・床・天井・壁

円柱からなる隅柱の内部の角は丸く加工せず、角を立てたままである。外部に、腰長押と内法長押を廻す。柱の上に梁を架け渡し、桁をのせる。

妻は豕叉首（いのこさす）、板壁とする。妻壁の室内側には棟束のみを立て、御正殿においては外部では妻壁より伸ばした棟木を角柱の棟持ち柱で受け、破風板の拝み寄りにそれぞれ 4 本ずつ鞭懸（くらかけ）を差す。

棟木から桁に化粧垂木を流し、間に母屋はない。両側面と背面は、厚板（25 ミリ厚）の横板を柱の板じゃくりに落とし込んだ板壁とする。床は床板敷き、天井は張らない。

建具

正面に両開きの板戸を建て込む。戸は四方に幅広の框を廻し、鏡板を嵌める。両脇に小脇板、戸は方立てに蝶番で留め付け、向かって右の戸の召し合わせ近くの落としの鍵で戸締まりする。

各建物の板戸外側には、全棟に共通する現在の鉄製錺金物以外の金物が取り付いた痕跡が風蝕差及び止め釘穴として残り、扉により一定ではないものの数代分確認できる。以前のものは銅製でおおかた現状より小さく、止め釘の本数も少ないことから、風であおられて破損したのちに取り替えられてきたことが推測される。（錺金物の変遷に関する調査は 2-2-2 で報告。）

縁廻り

御正殿には正面と両側面の 3 面に切目縁が廻されている。高欄が取り付き、正面中央両脇に親柱が立つ。親柱の銅製擬宝珠に陰刻などの銘はない。八幡社・春日社は正面にのみ切目縁が設けられ、高欄はない。

八幡社のみで確認したところ、最下段の両脇に枘穴（ほぞあな）のある礎石が据えられ、この位置で土台が前方に継がれているので、かつては木階の下端にも親柱が立っていた、あるいは立てられるように設計されていることが考えられる。御正殿の縁には高欄があるのでこのように推測できるが、他の建物の縁

三社殿の形式の比較

	御正殿	八幡社・春日社
規模	桁行 1 間×梁間 1 間	桁行 1 間×梁間 1 間
	間口 6.2 尺×奥行 5.2 尺	間口 5.8 尺×奥行 4.8 尺
鰹木	6 本	5 本
縁	正面と両側面、高欄付	正面のみ、高欄なし
棟持ち柱	あり、角柱	なし

は正面だけにあり高欄がない。現在階段の一番下の段には石材が用いられていることから、この範囲は風雨に晒されて傷みやすい状況にあったため、材質が変更されたことがうかがえる。

貫で繋ぐ縁束がのる正方形の礎石は比較的大きく、本殿の柱下の礎石と同じ大きさである。

身舎の床下は、周囲を竪板張りにして閉鎖されている。

屋根

茅葺の屋根は昭和 30 年代年に鉄板で覆われ、表面は赤色のペンキ塗とし、今までに 2 度塗り直しされている。大棟の上には千木と鰹木がのる。鰹木の本数は、御正殿が 6 本、八幡社と春日社がそれぞれ 5 本と規模に応じて変えられている。これらも金属板で覆われている。

軒廻り

化粧垂木に反りはなく、先端に錺金物が取り付く。いずれの建物でも化粧垂木の支割は、間口 1 間を 6 等分した値とする。茅負・裏甲もまっすぐである。茅負正面両端に八双金物がとりつく。

外構

黒色の瑞垣が 3 棟の本殿の周囲を囲み、背面中央に門を設ける。各本殿の正面を石敷きで繋ぎ、周囲を白い玉石敷きとする（玉石は 10 年前に敷設）。

本殿前石畳

瑞垣と門

棟札墨書書き下し

享保拾八癸丑歳　天下泰平　下総国相馬郡塚崎村

奉建立神明宮三社一守成就所

九月六日　国土安全　神主　守出雲守

塚崎村　藤心村　逆井村

高柳村　藤ケ谷村　和泉村　惣氏子

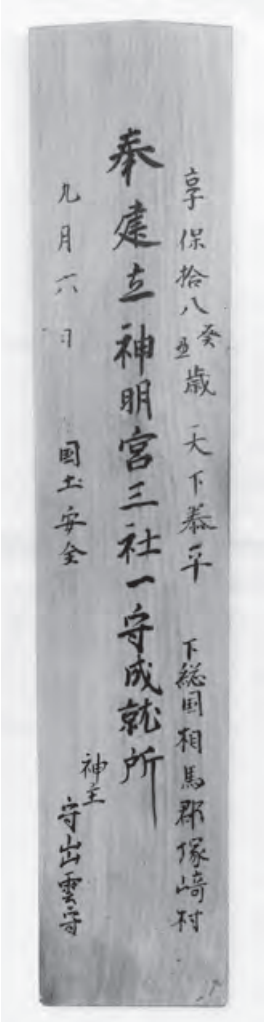
大井村　片山村　酒井根村

社人　枚浦主水　勘解由

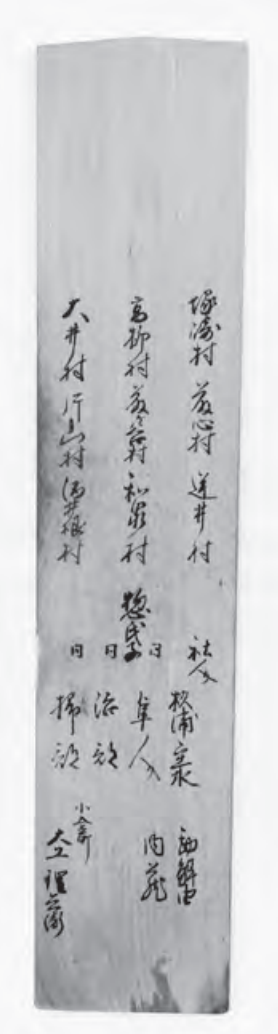
同　隼人　由蔵

同　治頭　小金町

同　掃頭　大工　権兵衛



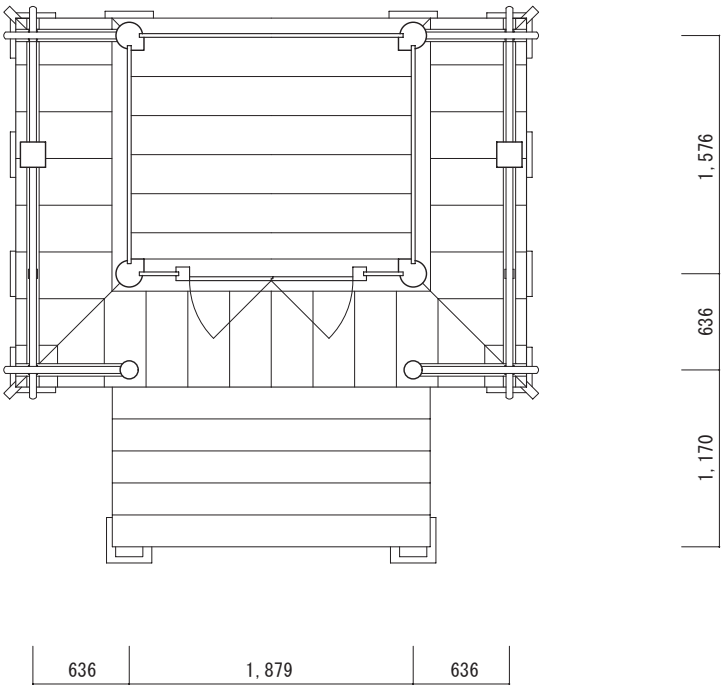
表面



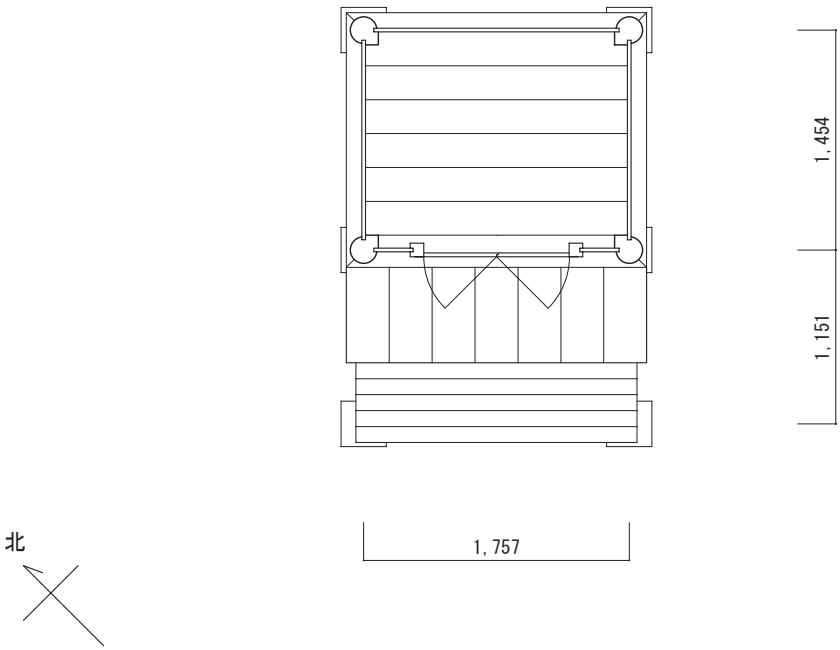
裏面

本殿棟札　享保 18 年（1733）
御正殿宮殿の屋根内に納められていた

高さ（全長）393 ミリ、下端幅 74 ミリ、厚さ 6 ミリ
肩幅　81 ミリ、肩高さ 3 ミリ



神明社　御正殿
平面図　s=1/50



神明社　春日社・八幡社
平面図　s=1/50

御正殿

屋根裏見上げ

内部の隅を見上げる。隅は丸柱に加工されていない。

正面の扉を開けた状態

縁詳細

縁高欄架木 (ほこぎ) 交差部の
錺金物

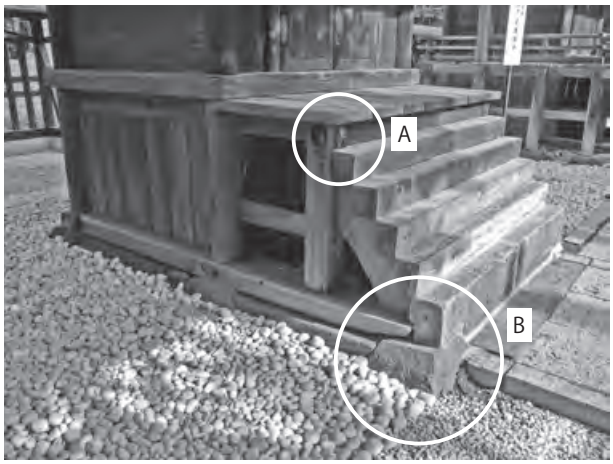
縁高欄親柱の擬宝珠

御正殿

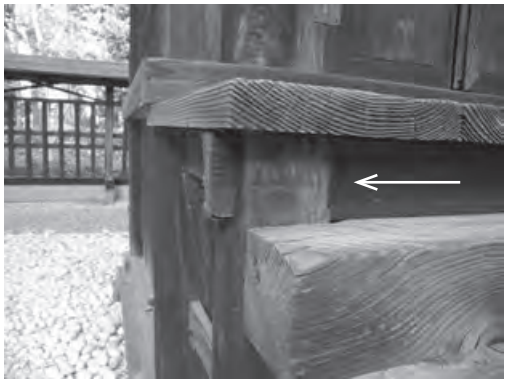
縁束は大きな礎石にのる。

木階最下段は石材からなる。
この下に礎石がある。

春日社



縁廻り痕跡



A　縁束には現状と異なる位置に風蝕痕があり、
木階の納まりの旧状を示す。

B　木階最下段（石製）ののる礎石天端には
ホゾ穴がある、手摺りの親柱が立っていたのか。

2-2-2　錺金物

本殿三社殿ともに、扉には現在の錺金物・蝶番のほかに、過去にあった錺金物・蝶番の形状を木材の風蝕差や日焼けの痕跡が目視でも確認できた。金物の止め釘穴の一部には抜き取られなかった釘が残されていた（写真 2~4, 7, 8）。これらの痕跡を形状や扉上の位置、さらに痕跡の重なる順番から錺金物を A～D の 4 種類、蝶番を a～c の 3 種類に分類、足跡を写し取り、図示した（図 1~4, 7）。

これらの金物の痕跡は重なり合い､同時期に建築された三社である程度の規則性が見られた。また、金物の材質も銅製から鉄製へと変遷することが確認できたことから、複数期にわたり金物が取り替えられたことがわかる。

過去（Ⅰ～Ⅲ期）の錺金物・蝶番の痕跡

錺金物 A の形状は、中でももっとも装飾性が高く、精巧な意匠である（図 3）。錺金物 B・C 及び鍵穴周りの錺金物 D は止め釘穴及び釘が観察できるため（写真 3~5）、何らかの錺金物が取り付けられていたことは確認できるが、その形状は不明である。錺金物 A・B・D は残された釘が銅製であることから（写真 2~4）、金物自体も銅製であったと想定した。

蝶番 a は、扉側に 2 段の円弧状の切り込み、柱側に 1 段の円弧状の切り込みが入る形状で、釘穴は柱側に 4 個、扉側に 7 個穿たれる。蝶番 b は、扉側の先端に 1 段の円弧状の切り込みが入り、柱側は隅丸の方形である。釘穴は柱側に 4 個、扉側に 5 個穿孔される。蝶番 c の形状は、単純な隅丸方形で、柱側と扉側にそれぞれサイコロの五の目のように釘穴が開けられている（図 1）。残された釘の地金から、蝶番 a・b は銅製、蝶番 c は鉄製であると想定できる。

現在（Ⅳ期）の錺金物・蝶番

三社ともに同規格の錺金具及び蝶番が取り付けられている。地金はいずれも鉄製である。蝶番には四隅に円弧状の切り込みが入り、円を利用した猪の目の透かしが穿たれている（図 2）。錺金物には猪の目の透かしのほか、円形のもの、円形を組み合わせたもの、円形と直線を組み合わせた透かしが見られる（図 4）。これらの金物の透かし及び釘穴は、それぞれ個々に微妙なズレがあるため鋳造品ではないと思われる。

蝶番は左右対称に 3 個ずつ取り付けられ、中央の蝶番及び錺金物は、扉の中央に揃えて取り付けられている（図 5）。

錺金物・蝶番の変遷

金物の形状や地金の種類から、少なくともⅣ期にわたり変遷すると考えた。それぞれの実年代は、当初の Ⅰ 期（享保 18 年［1733］）の建築年代以外は不明であるが、年表にあるように、神社の整備や改修が不定期に行われており、このいずれかの整備・改修時期と金物の取り替え時期が符合するのであろうと推測する。

変遷は、銅製の金物が取り付く時期と、鉄製のものが取り付く時期の大きく 2 時期に分け、更に蝶

番の種類や組み合わせから、それぞれ２小期に分け合計４時期に変遷図を作成したところ以下の傾向が読み取れる。①地金が銅製のものから鉄製のものへ、②形状は意匠を凝らしたものから、単純なものへと変わっていった（図６及び下記）。

各時期の構成

【Ⅰ期】

錺金物Ａ・Ｂ・Ｄに銅製の釘が確認できる。当初の装飾が一番華美であったろうと推測し、社殿には当初建築時より錺金物が全て取り付いていたと想定した。蝶番ａは春日社のみ上段と下段に確認できるが、ほか二社は下段のみである。蝶番の組み合わせの根拠についても乏しいが、Ⅰ期～Ⅲ期は蝶番が４個ずつ取り付いていたと想定し、春日社は蝶番ａが２個ずつ上下段に、蝶番ｂが２個ずつ内側に取り付いていたと想定した。ほか二社は蝶番ａが最下段に１個ずつ、その上に蝶番ｂが３個ずつ取り付いていたのであろう。

【Ⅱ期】

錺金物Ａ～Ｄは Ⅰ 期のものが全て取り付いていたと想定する。蝶番は全てｂに取り替えられたと考えられ、Ⅰ期とⅡ期の違いは蝶番ａがｂに取り替えられただけである。このため、Ⅰ期とⅡ期の時代差はさほど大きくないと思われる。

【Ⅲ期】

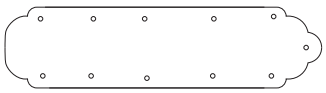
銅製の蝶番ｂが鉄製の蝶番ｃに全て取り替えられる。銅製の錺金物Ｂ・Ｃ・Ｄもこの段階では取り付いていない可能性がある。その代わりに錺金物Ａが鉄製のものに取り替えられた可能性があるが、現状ではその痕跡は確認できない。現在の鉄製金物の内側に痕跡が残っている可能性があるが、現状ではその痕跡は確認できない。

また、木材の風化差、色調差は金物が取り付いていた時間差を示すと考えられ、風化が少なく、色調の薄さが顕著であるものが蝶番ｃであることから、蝶番ｃの取り付いていたⅢ期の期間がもっとも長かったであろうと想定できる。このほかの金物については、さほど差を感じられず、金物が取り付いていた期間もほぼ同期間であったと考えられる。

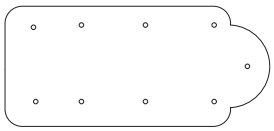
【Ⅳ期】

現在の鉄製の錺金物、蝶番。

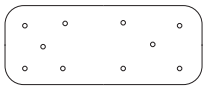
図 1 蝶番痕跡 a ～ c ＜ I 期～III 期＞



蝶番 a ＜ I 期＞

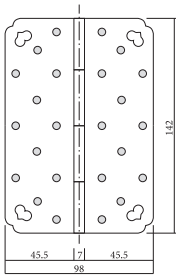


蝶番 b ＜ I 期・ II 期＞



蝶番 c ＜III 期＞

図 2　蝶番＜IV期＞



○・・・釘頭

図 3　錺金物痕跡 A ＜ I 期・ II 期＞

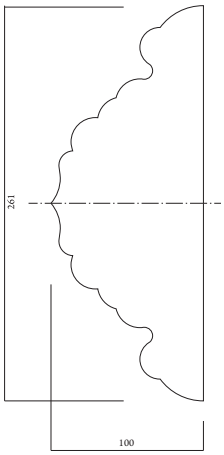
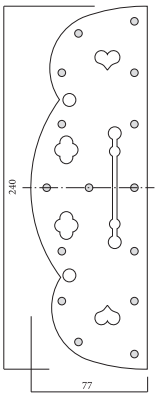
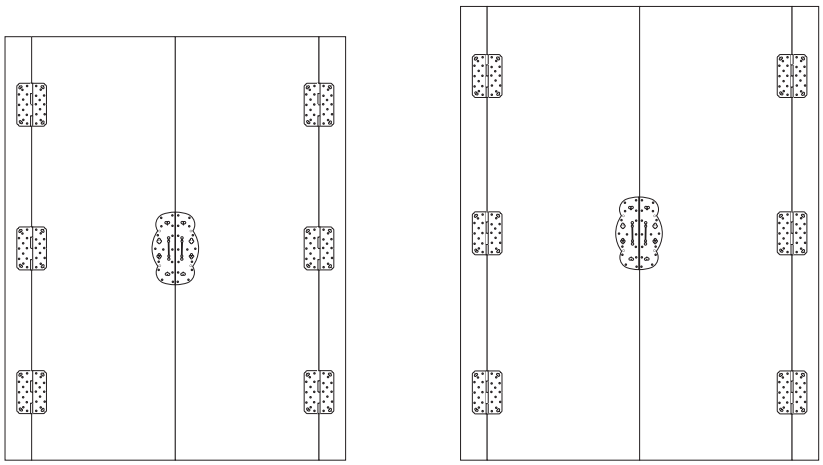


図 4　錺金物＜IV期＞



s=1/5

図 5　錺金物・蝶番取付位置＜IV期＞（右：御正殿、左：春日社、八幡社）



s=1/25

錺金物

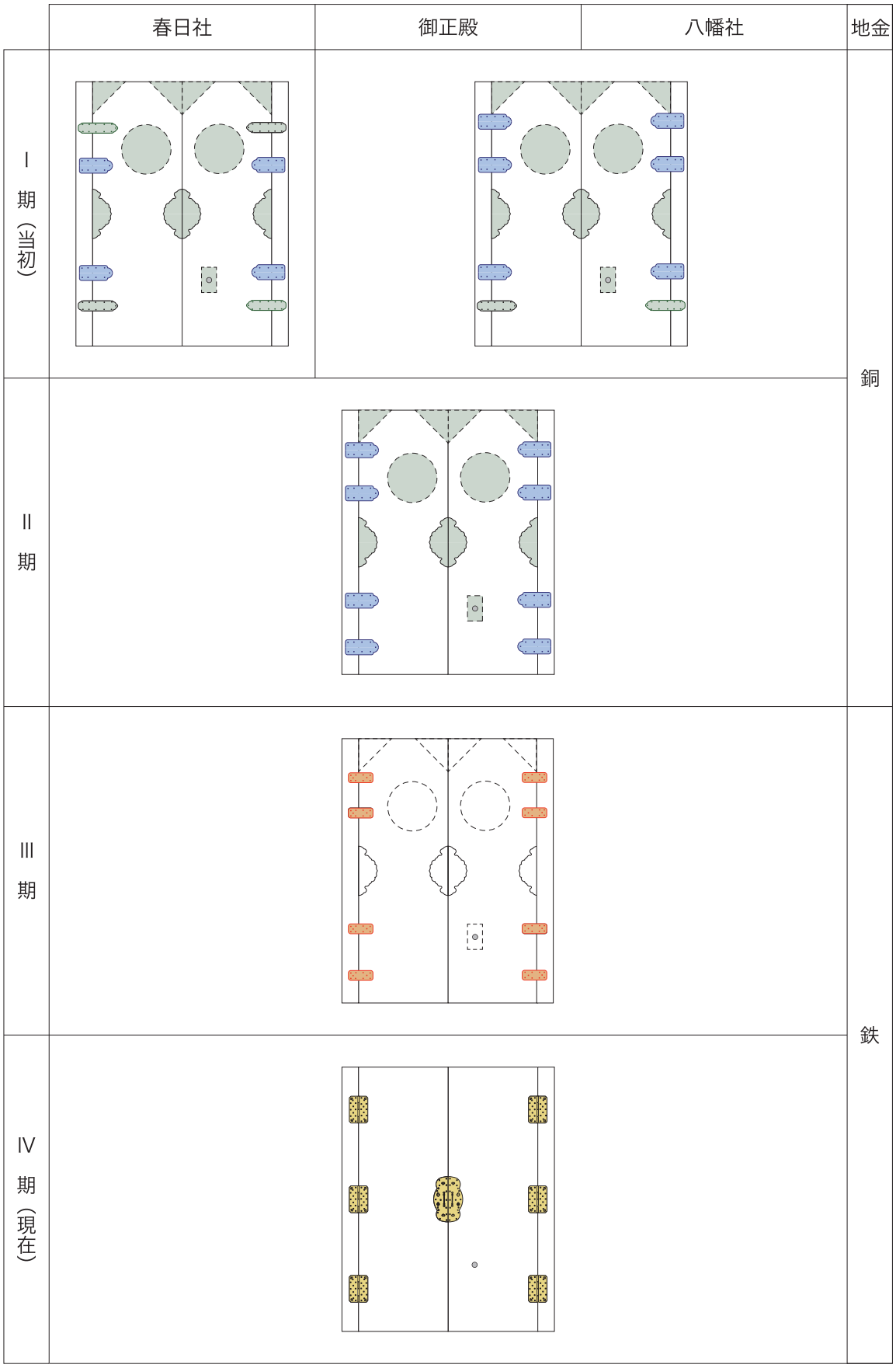
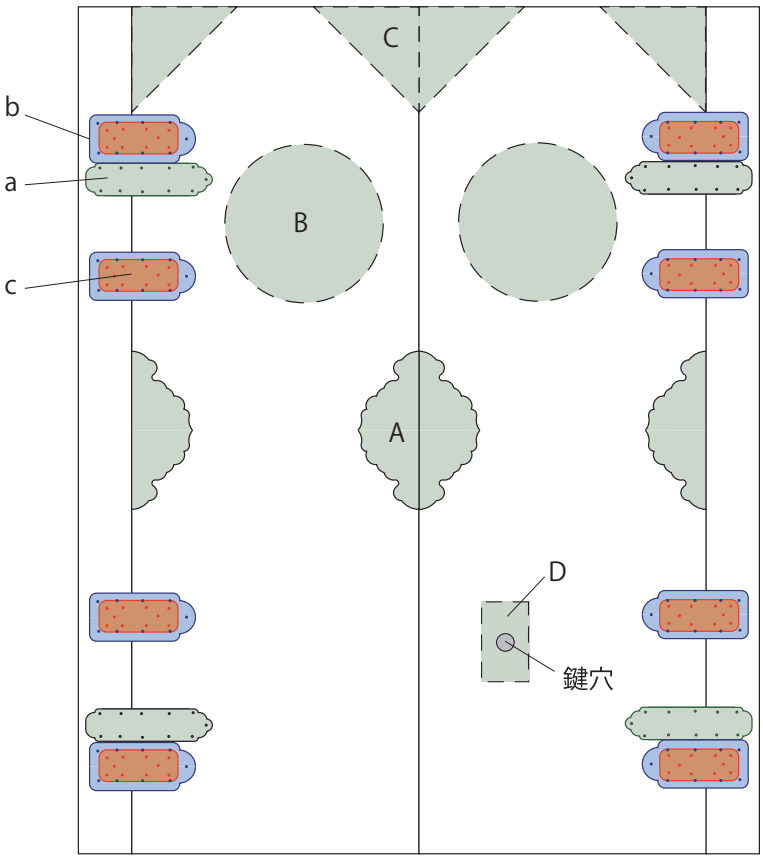


図 6　扉変遷図（御正殿と春日社・八幡社の扉は寸法が異なっているが、模式的に同寸法で示した。）
＊図中破線は何らかの金物があったと想定されるが形状が分からないものを示した。

図 7　錺金物痕跡 (A~D) 及び蝶番痕跡 (a~c) と取付位置



＊蝶番 a の上段の痕跡は春日社以外は確認出来ていない。
＊図中破線は何らかの金物があったと想定されるが形状が分からないものを示した。

凡例　▼・・・釘　▽・・・釘穴

写真 1　扉に残された痕跡全体像
＜春日社＞

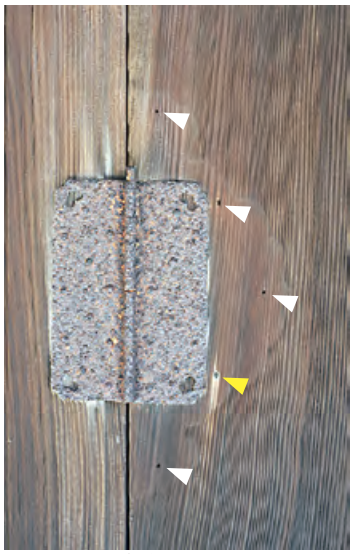


写真 2　錺金物 A の痕跡と銅製釘、釘穴＜春日社＞

写真 3　錺金物 D の銅製釘と釘穴＜春日社＞

凡例 ▼・・・釘　▽・・・釘穴

写真 4　錺金物 B の銅製釘と釘穴＜春日社＞

写真 5　錺金物 C の釘穴＜春日社＞

写真 6　蝶番 a ～ c の痕跡＜春日社＞

写真 7　蝶番 a~c の痕跡と蝶番 c の鉄製釘＜御正殿＞

写真 8　蝶番 b の銅製釘＜春日社＞

写真 9　現在の蝶番＜春日社＞

写真 10
現在の扉中央錺金物
＜春日社＞

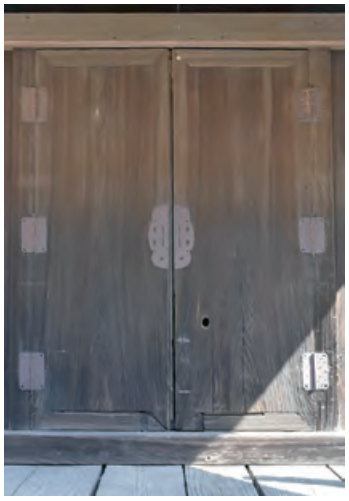


写真 11
現在の前扉
＜御正殿＞

3　石鳥居

柏市指定文化財神明社石鳥居の礎石の不同沈下に伴う鳥居本体の傾きが確認されたため、2019 年度に柏市の補助事業として修理が実施されることとなった。石鳥居の修理に先立ち、柏市文化財保護委員会に、以下の通り、文化財の状況が報告された：経年により向かって右の柱が沈下し、傾きが緩くなっている。柱の沈下を是正するためには、基礎石を掘り起こして安定させる地業が必要となる。従って、神社側では高い位置にある方の鳥居の石材を足元で切り縮める修理方法も考えている。

これに対して同委員会からは、基礎を削掘する工事によって江戸時代中期に実施された地業の一部が失われる。現在低くなった柱の下に飼い物をいれて高さを調整し、笠木のずれをなくす方法を検討して欲しい。さらには貫の高さも水平となるので、柱を加工せずに施工できる。既存の石材に刃物を入れることなく施工できる方法を選びたいとの提案をした結果、事業主と施工者の理解を得て、修理が行われた。幸い鳥居の基礎地業が比較的単純であったために、地中の石材を加工しなくとも、不陸の是正を実施できる状況にあった。

石鳥居札発見状況
御正殿東妻の束に釘打ち止め

石鳥居札　宝暦 7 年（1757）
裏面には墨書なし
高さ（全長）494 ミリ、下端幅 111 ミリ、厚さ 7 ミリ
肩幅　113 ミリ、肩高さ 14 ミリ

寄進札墨書書き下し

宝暦七　丁丑歳
奉寄進神明宮石鳥居点火泰平國土安全
三月大吉日

祢宜　本多伯耆守
神主　敬白
守大隅守
願主　吉田共藏
同　清宮長兵衛

石鳥居

石鳥居（2019 年 2 月撮影、修理前）

宝暦七年丁丑二月日
執政中太夫拾遺伯州刺史藤原正珍依為舊領采地謹建焉

西柱

下総國相馬郡塚崎村
神明宮　石華表

東柱

石鳥居　陰刻と書き下し

2019 年 12 月

1　鳥居に足場を架けて、参拝者を矢印の方向に迂回。

2　根石を吊り上げる。

3 【工事対象】正面向かって右側の柱の沓石と周囲のコンクリートを撤去した状態。根石が現れた。左右の柱を繋ぐ地中梁のような構造はない。（画面左下が鳥居の中心の向き）

4　根石の下に地業はなく、地山となる「はに」土の上に直にのる。周囲の樹木の根が育って根石の下に入り込み、石は約 30 ミリ持ち上げられていた。

5　クレーンで根石を吊り上げて、この下の地面の状況を確認。

6　根石の据え直しは、柱の傾きが左に揃うように外側に 40 ミリ移動し、木の根により持ち上げられていた分低くした。地面をすきとり、タコでそっと叩きながら調整。

神明社石鳥居修理工事　事業主：神明社、施工者：東匠（柏市）・フルサワ社寺建築石材（笠間市）

石鳥居

修理後の鳥居　正面

修理後の鳥居　背面

手水鉢 1
寛文 9 年（1669）
柏市指定文化財
「神明社手洗鉢」

［陰刻書き下し］

敬白　　信心旦那
奉納庚申待成就
　寛文九己酉年　御神前手水鉢
（背面）
御神楽衆

手水鉢 2
安永 2 年（1773）

［陰刻書き下し］

大々構中
安永二癸巳年
二月七日

拝殿前の天水桶
コンクリート製。側面に「国威宣揚」「武運長久」などの文字が見られる。第二次世界大戦時に金属製の桶を供出した後に奉納されたものか。

井戸筒　昭和 34 年 (1959)
コンクリート製、外形 90 センチ、厚さ 7 センチ、高さ 60 センチの管を重ねる。水面は 7 メートル以上地面より下方にあり、弁天池の湧水と同じ地下水に続くと思われる。

社務所

社務所／旧幄舎（とばりや）　大正 4 年（1915）築
社務所となる前は、神楽見学のために遠方から来る参拝者にお膳を提供する場として利用された。
地域の村社までを含む神社の神職達が集まり、ここでもてなしを受けた。
建物は御大典記念時の幄舎としてモミ材で建てられた。

※ 以降、各建物の建築時期は、『沼南風土記』沼南町、1981 に基づく。

鳥居から拝殿を見る。現社務所（画面右）の柱間は開放されており、神楽見学者をもてなすのに利用されていた。
撮影時期不明
［市教委蔵］

拝殿

拝殿は、近年大規模な改修を経て、屋根の構造を全面的に更新しながら、本殿側には周囲にガラス建具を建て込んだ幣殿が増築され、3 棟の本殿を前に参拝できるようになった。
拝殿内には、「拝殿造立本村幣物」（明治 8 年）を含む寄進額など神社の歴史に関わる史料が多数掲げられている。

拝殿
2013 年再建
旧拝殿の部材を一部再利用

拝殿背面に設けられた幣殿
ガラス窓から本殿三社を拝める

旧拝殿
明治 8 年（1875）築
唐破風の向拝、屋根に千木と鰹木をのせる
（上）昭和期（屋根を鉄板で覆った昭和 32 年以降）
守喜久男撮影
（左）昭和期　茅葺屋根
［両者共市教委蔵］

神楽殿

旧神楽殿
明治 35 年 [1902] 築、2019 年建て替えのために取り壊し。
6 本の柱で茅葺屋根を支える、四方が開放された建物である。
毎年 10 月の祭礼時に神楽の舞台となる。「十二座神楽」は、柏市指定無形文化財。

2011 年 3 月の東日本大震災時に北西の柱が縦方向に破断し、床下に補強が施されていた。地震時には固く締まった屋根が形を保ったまま大きく揺さぶられたため、柱に直接負荷がかかり、折損した。

旧神楽殿床下　強固な床組が舞台を支える

旧神楽殿
撮影時期不明
［市教委蔵］

解体中の前身神楽殿（2019 年 11 月）

前身神楽殿の軒・天井廻り

再建中の新神楽殿（2021 年 3 月）

新神楽殿には、前身建物の部材が一部再利用された。

境内

お籠もり殿

境内

沼南の森として、緑豊かな境内地の樹林を開放。社叢は、柏市となる前の沼南町時代から町民の森に指定されていた。多種多様な樹木が生い茂り、小動物・鳥・虫などの生物の住みかとなっている。

神明社の社叢を上空西から見る　1978 年撮影
中央に見える大きな屋根は拝殿［市教委蔵］